

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 5月 25日現在

機関番号：33902

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成21年度～平成23年度

課題番号：21520072

研究課題名（和文）近世の寺社と御師的宗教者による廻檀・配札活動についての研究

研究課題名（英文）Traveling religious specialists distributing talismans and their temples and shrines in Edo period

研究代表者 林 淳（HAYASHI MAKOTO）

愛知学院大学・文学部・教授

研究者番号：90156456

研究成果の概要（和文）：

第1に、原田家の4000点の御札のカードを取って、撮影を実施した。それによって明治維新を境にして御札の形態、量が大幅に変化することを確認できた。遠方の寺社の御師による活動が減り、近隣の寺社の御札が増加することも確認できた。第2に、尾張藩と遊行上人の活動、英彦山の山伏組織について資料を収集した。第3に、神子や女性宗教者について研究会を重ねて、女性宗教者の家族形態の多様性を知ることができた。また尾張藩の寺社行政について史料を検討し、自国と他国の宗教者への対処の相違を明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：

Firstly, to put over 4000 talismans belonged to Harada family in order, I made the database and finished to take pictures of them. Examining the database, it can be clear that the amount and the style of talismans changes drastically since the Meiji restoration. Also it can be said that talismans of religious specialists in remote big temples lessened, on the contrary those of neighborhood temples and shrines increased since then. Secondly, I could gather historical materials to know wandering monks named Yūgyōsyōnin who had visited Owari to contact with the local government as well as Yamabushi monks in Hikosan. Thirdly, I held the study meetings and talking on female religious specialists and shamans. Furthermore, I could translate a historical document on religious policy of the Owari government and make clear that their reaction to outsiders was more severe than that of insiders

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成21年度	1,100,000	330,000	1,430,000
平成22年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成23年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、宗教学

キーワード：宗教学、民俗学、近世史

1. 研究開始当初の背景

(1)近世の宗教史研究では、修験、陰陽師、神

子、神職、虚無僧、夷願人などの流動的で勸進を糧とする宗教者・芸能者の研究が盛んに

なった。そこには、本山・本所・頭が、そうした宗教者・芸能者を編成して身分集団を形成していく過程への関心があった。他方で、よく似た存在である伊勢神宮や津島社の御師や立山の衆徒のように霊地・大寺社に属して、派遣される「御師的宗教者」を考えるべきだと考えるにいたった。この二つのタイプがあるにもかかわらず近世の勸進研究では、あまり意識されることなくこれまで進められてきた。

(2)原田家所蔵の御札が林研究室に寄託されたので、その整理、データベース化を行う。

## 2. 研究の目的

3つの目的に分かれる。

(1)原田家の御札の整理、データベースの作成、撮影である。

(2)「御師的宗教者」に関する具体的な分析を行うこと。彦山の「御師的宗教者」に関する資料を収集する。あわせて遊行上人関係の資料も集める。

(3)勸進の宗教者・芸能者を専門に研究している研究者を集めて研究会を実施する。これまでの研究史において何が問題になってきたか、問題になってこなかったかを問い直す

## 3. 研究の方法

(1)御札のデータベース作成と撮影の実施。

(2)彦山、遊行上人に関する資料を収集するためのフィールドワークの実施。収集した資料の解説。

(3)藩の寺社奉行がいかに関進の宗教者・「御師的宗教者」を処遇したかについては、『尾張寺社方覚書』（京大法学部図書室所蔵）の翻刻と内容分析を行った。

## 4. 研究成果

(1)原田家には、102の御札の束が残存している。収集期間は、原田家の屋根裏にあった大箱に貼り付けてあった紙に記されていた1826年から1928年までと考えられる。一年ごとに貼りかえられ、まとめて保管されていたと思われる御札の束ではあるが、なかには2年分の御札が貼り付けられている状態で剥がされたものが幾つかある。

原田家にもたらされた御札をみると、西は出雲から東は常陸までと広範囲の寺社からもたらされていることがわかる。御札を発行している近隣の寺社には鳳来寺をはじめ、秋葉寺や秋葉神社、砥鹿神社、村内の寺社等があり、遠方に至っては下総の東勝寺、富士山や立山の山岳系寺院等が見られる。そのなかでも特に秋葉や鳳来寺、伊勢、津島、多賀等からのものが全体を通してよく見ることができる。以下、多く見られる御札のなかから幾つかをあげていく。

鳳来寺から発行されている御札は、次の二

点が見られる。一つは前半の番号が付いている袋には、「鳳来寺 岩本院」と寺院名が記されているものである。もう一つは峯葉師の絵図であり、全収集期間を通して見ることができる。この絵図は、御札の中札としてあるものと、絵札単体で発行されているものがあった。また、大正以降になると、個人名が御札の裏面に記載されたものも見られた。

秋葉系の御札も全体を通して多く残されている。前半に比較的多くみられる秋葉寺と、廃仏毀釈以降に表記がみられる秋葉神社の他に、三尺坊の「絵札」と「奉祈念秋葉三尺坊守護所」と朱刷りされたものがみられる。特に「奉祈念秋葉三尺坊守護所」に関しては、御札の中札としてあったものも幾つかあると思われるが、多くは御札単体を参拝もしくは代参によってもたらされたものと考えられる。

そのなかでも収集期間全体を通して、伊勢神宮から出されている御札が多く残されている。形は剣先型の御札が多く、その多くのもに「御師 足代七大夫」の名前が記されている。中には複数の御師名が刷られた御札が存在するものの、一袋のみであったのでどのような経緯で至ったのかは、今後調査をしていきたい。また、明治時代になると御師による配札活動が禁止されることによって、御札から御師名の記載がなくなった。更に、いくつかの御札には「木香丸」が付けられており、配札の時にお土産として付けられていたものであろう。

原田家に残存する御札は約100年の歳月をかけて収集されてきた。この100年のなかで大きな出来事の一つに明治維新がある。特に廃仏毀釈が起こったことによって御札の表記や信仰圏に変化が現れる。原田家に残されている江戸時代末期から廃仏毀釈前までと思われる御札の表記の多くに寺院名が刷られていた。廃仏毀釈が起こると、特に山岳系寺院や神宮寺とその配下寺院などが発行する御札が完全に姿を消したことによって、寺院名が表記されている御札がほぼ見られなくなった。更に、明治政府による御師制度の廃止によって伊勢や熱田、津島など御師名が入った御札から御師名が除去されていった。これらの寺院に代わって明治時代以降になると、近隣の寺社や宗教者が発行する現世利益を主とする御札が急増する。彼らによって発行される御札が増加してきたことによって、廃仏毀釈以降も一年間に配札される御札の点数は減少することはなかった。

収集開始当初、御札の多くは比較的遠方の寺社が発行するもので、特に廃仏毀釈によって廃寺となった神宮寺を要する神社や牛玉寶印を発行していた山岳系寺院など多くの寺院によって発行されていた。廃仏毀釈以後は、近隣の寺社や民間宗教者による御札の発行

が増し、一年間に集まる点数はほぼ変わらなかった。

また、原田家に残されている幾つかの御札には年号が記されている。民間宗教者が直接原田家に出向き、一族の希望を伺い祈祷を行ったものと推測している。この宗教者によってつけられたと思われる年号は明治7年から見られる。明治7年以降は、ほぼ毎年のようにこの宗教者の訪問があり、御札は昭和3年まで残されている。

およそ100年間、原田氏によって収集された御札に書かれた内容から祈願項目ごとに分類すると以下のような項目が考えられる。

a 寺社号

b 牛玉寶印

c 祈祷

d 御影

e 守護札

f 諸神号

a 寺社号には、「御祈祷」や「護摩供」と刷られた下に寺社名がある御札とした。特に収集前期(江戸末期頃)に多くみられ、多賀大社の神宮寺である不動院や観音院、愛宕や立山などからの御札が多く残されている。b 牛玉寶印は、立山や富士、熊野からのものが見られた。多賀大社から発行されている牛玉寶印も残されているが、これらは中札にあたるものと考えられる。明治期になると、牛玉寶印は見る事ができなくなった。c 祈祷については、江戸末期から「御祈祷」と刷られた祈禱札は多く見られているが、本調査での「祈禱」とは、個人や一族など家内安全を祈願する家祈祷や現世利益など祈願したものとした。その多くは明治時代以降に民間宗教者によって発行したと思われる御札であり、祈願項目には五穀豊饒や家内安全、子孫繁栄、子孫長久、諸願成就、悪霊退散等が書かれている。d 御影の多くは、カラス天狗や鳳来寺の峯葉師、茶枳尼天が多い。他に大黒天や恵比寿、下総東勝寺の佐倉惣五郎絵図が見られる。絵札に刷られている御影には発給場所を記されたものが多いが、幾つかは「氏子安全」や「五穀豊熟」といった祈願文が刷られている絵札も明治後半からでてくる。e 守護札とは、発行者が特定の場所に祀るように指定した御札とした。指定した痕跡は稀にしか残されていないが、幾つかの御札には祀る場所が指定されていたものと考えられる。f 諸神号は、全体的に多くみられ、特に秋葉の三尺坊や豊川の茶枳尼天と刷られたものが多くみられる。明治期になると、これらに加え加具都智之神や波迹夜須之神、金山毘古之神など日本古来の神号が発行されるようになってきた。また民間宗教者から発行されたと推測される五経の霊神札も明治時代には多く残されている。

(2)つぎに、光明寺文書を使って近世における遊行上人の御札配の実態を、『遊行日鑑』と、光明寺文書、さらに御札配りの実態を画と文で伝えた『萱津道場参詣記』という複数の史料を使って検討する。遊行上人の廻国について、受容と拒絶という二つの相対立する局面から見直してみる。遊行上人の廻国は、民衆からすれば、遊行上人はお札配りをはじめ大黒・愛染・疱瘡などのお札やお守りを与え、後世の往生と現世の利益を保証してくれる存在であり、民衆は生き仏としての遊行上人の廻国を熱望していた。末寺側にとっても、遊行上人廻国の宿泊所に設定されることは、藩主が堂塔伽藍の改築・新築に手を貸してくれることになり、寺としての面目を一新する機会であり、また末寺の僧侶は、上人から直接僧階や色衣を上昇させてもらえる機会でもあった。藩としても、民衆の要望に応じて、地元経済を活性化させるチャンスであったと思われる。しかし何より藩が、遊行上人の廻国を受容した理由は、幕府の伝馬朱印の威光にあったと考えられる。他方で、遊行上人を応接するとなると大きな問題が生じた。遊行上人は廻国の際、百人以上の伴僧を連れて来るので、それら全員の食事や宿泊、さらに宿泊所の寺の修繕費用を含め、巨額の応接費がかかることになったので、この巨額の応接費が捻出できず、藩主ですら自領内での応接を拒否することがあった。例えば、第五代賦存上人の時、西国だけで、岩国、宇和島、今治、土佐といった外様譜代の雄藩のみならず、いわゆる御三家の紀州藩や尾張藩までもが、城下および領内通行を遠慮してほしいと願っている。その理由は災害や不作などが挙げられているが、実際は大名自身が応接費用の捻出に困っていたのである。末寺についても、経済力の弱い寺院では遊行上人の廻国を拒否してくるところもしばしばあった。地元住民にとっては、上人が通行する際の荷物持ちや道筋の修繕などに人員を出し、上人一行の料理や給仕などの接待を行うが、そこで掛かった費用は藩が出してくれる場合もあるが、地元の村・町の負担にされてしまう場合が多かったことから、地元住民にも不満はあったようである。このように遊行上人の廻国については、大方は受容したが、応接にかかる費用の問題から拒絶する対応もあった。以上の点から、遊行上人による勧進・開帳は、藩や末寺の助力を得て実施される大がかりなものであって、本山・本所に編成された勧進の宗教者とも「御師的宗教者」とも異なる位相にあった宗教者であったことがわかる。

(3)つぎに近世の英彦山の300坊余りを数える山伏の一山組織について述べてみる。近世中期頃から始まる経済基盤の弱体化や、幕末における藩との対立があつて、明治の神仏分

離によって組織は崩壊する。それまでは英彦山が無本寺として幕府に認められ確固たる組織構造を持っていた。聖護院門跡との本末論争を経て、本山派からは脱して独自の一山組織を保持して、そのなかに本山派にも当山派にも組み込まれなかった山伏集団があった。これらを総じてみると、英彦山は公家・武家の双方と繋がりを保つことでその独自性を獲得することが出来たと言える。近世初頭の英彦山には座主を頂点とし、宗教的側面と政治行政的側面が混雑しないように組織が存在していた。宗教的側面では、組織の構成員である山伏が、山内で担当する祭事により、神道系山伏、仏教系山伏、天台系山伏「衆徒」の三種に区分されていた。対して政治側面では奉行職が設置され、組織内部の環境整備や建築などの種々の業務に携わっていた。組織構造上、山伏の上位に奉行職が位置する形であり、上意下達・下意上達の組織構成となっていた。また、このような構造を維持するために法度や式目が定められ、独自の自治組織であった。山伏は、山内での位置付けでは「彦山四九窟」で修行を行い、「彦山講」を初めとする山外の参詣者を回って先達の役割も演じた。英彦山の山伏こそ、本山派、当山派という全国的な山伏編成には組み込まれることなく、それによって「御師的宗教者」の性格を濃厚にもったと言えよう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ①林淳、宗教的学知の形成、査読有、日本思想史学、43号、2011、5-12
- ②林淳、近世陰陽道と暦、皇學館大學神道研究所紀要、査読なし、27輯、2010、1-26
- ③林淳、学問史から見た仏教史学会、仏教史学研究、査読有、53巻1号、2010、103-114
- ④林淳、近代仏教の時期区分、季刊日本思想史、査読なし、75号、2009、3-13

〔学会発表〕(計6件)

- ①林淳、宗教的学知の成立、日本思想史学会大会、2010・10・16
- ②林淳、村上重良と近代宗教史研究、日本宗教学会大会、2010・9・5
- ③林淳、日本の宗教学、トロント大学主催国際宗教史会議、2010・8・19
- ④林淳、近世宗教史と如来教、「宗教と社会」学会大会、2010・6・6
- ⑤林淳、江戸時代の暦、近畿大学主催講演会、2009・7・3
- ⑥林淳、近世の陰陽師とキリシタン、コロンビア大学主催国際シンポジウム、2009・5・2

〔図書〕(計3件)

- ①林淳、他、法蔵館、冥顯論、2012、473
- ②林淳、他、佼成出版社、新アジア仏教史 13巻、2010、459
- ③林淳、他、山川出版社、戦後知の可能性、2010、441